○御主人の家は高利貸の如く伯父さんの
あいで先祖代々の土地を沢山持つてゐる。主人
は高等学校中学校中学校中学校、
○御主人は仕事の方では強くもう決して
情しさが絶つて来た自づと口喋んで、却て他の人よりは
口数多のやうだつたつけ、弱かつず、これが僕の性分の一端よ、

○仕事場で注いたものは僕ばかりでなくなつたよ、僕や春のやうな
あの人、更角は情の人で注ぎ人だからあんなのはいゝ事になるまよ、
○注れでも云ふことだが、実人が
私のなかと思ふ……とぬかすが、主人の武遍一片の実人である
く計的に出来てゐると、どうも
立ち注くよ、
○実陸で来ることゐて、春や亜と

言ってあるまう、大丈夫えんは
これ剣を振じて言うべしだ、
俺達やうなあ近眼でいどうも
困まる、どうかして一度鏡を見
たものだ、こまるまで一度でやってみた
いものだ、俺達を方が早いのだ、
下らぬ、あやしい筆のもの先に
くらたくまるまる、たまには良いよ、
しっかりやり玉へ、銃剣で胸板貫へ
くるはよし、地雷火を跳飛すもよし、

大砲の丸を頭で受けるもよし、サー
べんで叩かれるもよし、(冬陣大三年
冬にすべし若し戦死に白玉八ば)唯
下らぬ病魔の為降参するは
僕は飽くまで武士なれば、兄の
身の健康なるを祈り戦争
祈ってゐます、出来るし玉へ。
○学を修じて我所を執るい実に
ついよ、面白いよ、我時いそれに陥る
よ、お物に復されど、無学を執つ

て役の務るのも代の風をうぶい
借りるのも格好するわだ、けれども
貸事なども効で困まる、うらやましい
よ、

○フオルゴットこ、ナットの黒いめ丹の
しまへるや、ちを口元、足の絹甲
黒ゆやるよ、二年こよろしく、仕事
があれば貸はあくまでやって上げ
ます、

○義腹あるも私わだよ、うれのよ佐
の方も、
○わたしも私わだよ、足と僕三人と
○あれで下なりして、長甲をお私の洗衣
洗たてるは、
のぬが通つてありてるたよ、それ
が面白であつたよ、後でうつたの
だ、あまりもあるよ、口もも頑張
かつてみたよ、
○八橋で不快之、口元めり丹
○橋屋桃とあのーどんあこをます
るだい、年あし私へ、いまあ時に、

○なほ、御問合わせの件は、
たゞ、日曜毎に毎週師匠とのつゞき、お稽古、しかも毎週二十枚宛と云ふことだけ、をあしい
（
本の中の文句を花へまるしく云へて置いて、又例の沼の原杯あれをわたへ度しと置いておきたらば、つまらぬ
あるから、本当に迷惑して呉れ
玉へ、
○借の手紙、ゼヒ呉れたよ、しかし、沼が下の方通りに玉例
して居るのだから、勿論してください
○故三高の友人を紹介とゆふことがあるがさうだまよ、
しかし、その人に不情が多い、うまつぺらが多い、ゆるくるが長がくなる
の形であるね。今ごろ、これで失礼
文八兄
[illegible]